震災教訓の共有むすび塾@インドネシア（河北新報社と共催）

掲載日:2013 年 05 月 15 日　　(C)河北新報社

河北新報　平成25年(2013年)5月15日(水曜日)　特集　（18）

海外編　防災・減災のページ

巡回ワークショップ　@インドネシア・アチェ州

むすび塾

河北新報社は4月23、24の両日、巡回ワークショップ「むすび塾」をインドネシア・アチェ州の2地区で開いた。国際協力機構（JICA）との共催で、海外での実施は初めて。22万人以上が犠牲になった2004年のスマトラ沖地震・津波から8年余り。被災者は今もつらい思いを抱えながら、復興の歩みを進め、地震の記憶を伝承している。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長を進行役に、現地の住民と東日本大震災で被災した「語り部」の3人が、国境を越え、被災後の思いと教訓を共有した。

被災後8年 悲しみ今も

バンダアチェ市ムラクサ地区

■むすび塾に参加して

住民から「水が上がってきたぞ」と聞いて避難を始めたが「本当かな」と信じられなかった。津波は第1波より第2波、第3波と高くなった。夫と子どもが流された。今もお祈りをしている。
＝アイヌンさん(45)

アチェの人々は津波の存在を聞いたことがなく、どう行動すれば命が助かるのか、誰も分からなかった。後世に教訓を伝えることができるよう、日本とインドネシアが情報共有することを願う。
＝アンサリさん(63)

地元の古文書には、600年代と800年代に津波があったという記録が残っていた。津波は今回限りのことではない。神様は津波のことを「試練」と言っている。「忘れるな」とも言っている。
＝イスラム教寺院のザムザミさん(62)

津波対策専門家　ムザイリン・アファンさんに聞く

生業支援不足 復興道半ば

インドネシア・アチェ州の住民は復興や防災の現状をどう見ているのか。津波防災の専門家で、シャクアラ大（バンダアチェ市）研究機関のムザイリン・アファン所長に、「むすび塾」に同行した感想や被災地の課題を聞いた。

アチェ州出身、バンダアチェ市在住。シャクアラ大のGIS&リモートセンシング開発センター所長を務める。04年のスマトラ沖地震後は東北大に留学し、現在も東北大大学院博士課程に在籍する。42歳。